



114
A 75B
5

七月二十五日刊行ガセイト摘要

天正十一年四月
侯爵邸寄贈

日本在留英國公使^{イロ}、ハ^イリ^ト、ハ^イクス^ス氏トイ^ハゼ^イ、
リ^ド氏ノ間ニ偶發セル筆戰、始末ヲ釋スルニ曩キ
ニ^リド^氏日本ニ係ル一書ヲ著述スルニ方テ東京タ
イ^ムスニ散見スル事項ヲ勾引シ之ヲ其書ノ序文中ニ
掲シタルニ因源^ス蓋シ此東京^タイ^ムスハ頃日^アタ^ラシ
ケ^ツク^リ月報ニ同伴ヲ登録シ毒氣ヲ弘布セシ人ノ編^マ
スル所ナリキ
リ^ド氏又一書ヲ^タイ^ムス記者ニ授シ其日本紀事ニ
録スル所^ハ一^ハ條ヲ除クノ外^ニ悉テ眞實ナルヲ明言セリ
是ニ於テ^ハバ^イクス^ス氏^ハイ^ド公平ナル感情ヲ以テ今ハ
嘿止シ難シト云テ次ニ^ハ拔萃スル數言ヲ以テ答辨シタ

リ言ク初メマ。觀客ノ鑒定ニ一任シ。曾テ自ラ一言ヲ發
セ。サリシト雖。氏今「ド」氏更ニ貴紙ヲ籍リテ以テ共
録述スル所。總テ實正ナリト明言スルカラニハ。予亦タ
敢テ對抗氣象ヲ顯シ。其登錄說述スル所。總テ無根ノ糊
說ナリト言ハサルヲ得ス

右駁論起ルノ後「ド」氏ハ再ヒ書ヲ「タイムス」ニ投
タリ而シテ書中曾テ其前說ヲ証明スル所ナリ。惟氏カ
曩キニ日本ニ在留スルノ日時恰モ我使節ヲ交替スヘ
キ秋ナルヲ覺エタリト言テ以テ其說ヲ修飾セシメ
勉メタリ

更ニ眼ヲ轉シテ「ド」氏ノ著書ヲ閱ミスルニ一モ証
據トスル所ノモノヲ見ヌ。句々曖昧糺糊ノ中ニアリ。試
ミニ其數句ヲ茲ニ摘載セシニ。例令ハ予ハ斯ク告ケラ

レ。カリ又ハ其ハ予輩ノ當ニ言フヘキ所ノモノナリ。若
シハ予ハ他人ヨリ聽取スル所ヲ輯録セリ。等ノ如シ。又
數句アリ。曰ク此般ノ怨言ハ必ス日本内閣諸君ノ舌頭
ヨリ出ス所ニアラス。内閣諸君ハ殊ニ予ニ對スル毎ニ
言苟モ此般ノ事ニ涉ルナク。毎ニ優美ノ意ヲ表セラ
レタルハ。予カ尤モ驚嘆スル所ナリキ云々
「ド」氏ニ次テ「ハウス」氏起リ。其椽大ノ筆ヲ揮テ以テ
世人ヲ瞞着セシメ。予勉メ遂ニ大將「グラント」氏及「
ア、ジョン、ポウプ、ヘンネツ」氏ヲ呼テ此事ノ證人ナ
リト揚言セリ

斯ク両氏ノ議紛ミタリト雖。氏今如シ公平無私ノ判士
ヲシテ大將「グラント」氏ノ東洋ニ於テ英國ノ政策ニ関
涉セル實況（「ジョン、ルーセル、ヨング」氏ノ書ニ詳ナリ）及

ヒ「ヘンネツシ」氏ノ日本ニ於テナシタル演説ヲ熟閱
シ且ツ茲ニ居留ノ諸人ニ英國公使ハ果シテ能ク此諸
人ニ愛敬仰望セラレシヤ否ヲ問ハシメハ蓋シ「バーク
ス」氏ニ尤粗スヘキニ庶幾シ其「バークス」氏ヲ誹議スル
モノ、証跡トスル所ハ一時日本ニ漫遊シ最モ経歴ナ
ル居留人ノ年一年ヨリ疑惑スル人民ニ偶會シタルニ
三士ノ皮相論ニ外ナラス

ヘラルド

ハウス氏ノ妄言

數日前「ホール」モール雑誌中「ハウス」氏ノ一書ヲ掲載セ
シカ其記スル所概ネ予輩ノ曩キニ取撃シ穢シタル東
京「タイムズ」ノ一語ニ同シキヲ以テ曾テ之ヲ再板ニ附
セサリキ抑此書ノ記者ハ一種ノ劇疾ニ泥ミ宛モ狂犬
ノ如ク動モスレハ其鋭牙ヲ揮テ猥リ人ヲ刺撃ス故
ニ人敢テ之ニ近クナシ然リ而シテ偶該港ニ来ルモノ
亦タ能ク之ヲ知ラサルヲ以テ往々之カ為メニ侵テル
「ハア、リ」ド氏ノ如キハ尤モ其害ヲ受ケタルモノナリ
又大將「グラント」及ヒ「サア、ジ」ヨレ、ホー「プ」ヘン「ネツシ」
氏亦タ此疾ニ傳染セリ蓋シ此疾ハ綠色丸藥否綠色書

大
疾

冊ヲ以テスルニアラスンバ治スヘカラス
此ノ如ク此記者ノ為メニ往々誤マルモノアルアリ故
ニ這面ノ説ノ如キ亦夕之ヲ黙々ニ附シ去ルヘカラス
爰ニ其書ヲ按ヌルニ式ハ独リ自ラ之ヲ正説ト稱シ
先ツ次ノ一句ヲ掲シテ曰ク大ニ誹議セラレタル公使
ニ尤祖スルモノヲシテ誤解スルナリ又道謝スルヲ
ソニカ為メ其失行三項ニ分テ以テ論究スヘシ又曰ク
如シ實ニ細説ヲ要スルモノナラハ好テ之ニ應スヘシ
而シテ斯ノ如キ片腹イタキ事款ヲ啾々スルハ意ノ欲
スル所ニアラス云々
是ニ於テ予輩ハ我筆鋒ヲ以テ此奮激以テ充滿シタル
三個ノ風袋ヲ破リ請英人ノ眼前ニ暴籍シテ以テ因テ
慰ムヘシ

其第一項ニ曰ク
以下「ハウス」氏ノ説予ハ曾テ「アタ
ンチ」月報ニ録スルニ英國公使ハ英人ノ日本主港ニ
上陸スルモノヲ保護セシカ為メ英兵ヲシテ其海岸ヲ
警衛セシソントテ関申シ以テ苟モ日本ヲ嚇カシタル
トアルヲ以テセリ今茲ニ其始末ヲ約述センニ往年英
兵ノ本港ニ營在スルニ方テ日本税関吏ハ屢輸入貨物
ヲ不正不當ノ處ニ陸揚シ潛商スルモノアルヲ發覺シ
タリ是ニ於テ政府ハ遂ニ其指定シタル海関ヲ經ル
アラスンハ人ノ上陸ヲ縱サハル旨ヲ布告セシトニ至
レリ是レ寔ニ至當ノ事ナラスヤ然ルニ英國公使ハ之
ヲ聞クニ及ンテ日本太政大臣(外務卿ヲ經ス)ニ呈シ政
府波シ此布告ヲ發スルアラハ公使ハ英兵ヲ以テ海壘
ヲ結ビ英人ヲシテ何處ニ上陸スルモ亦夕難ナカラシ

シテカムヘキヲ伺申シタリ斯ノ外務省ヲ經ス直ニ
書ヲ太政大臣ニ贈ルハ業既ニ交際ノ格式ヲタリモノ
ナリ況ンヤ其伺申スル事件ノ甚ク無法ナルコト於テヲ
ヤ然ルモ政府ハ此脅迫ヲ受シタルカ故カ敢テ其布告
ヲ發セサリキ故ニ潛商ハ其翼ヲ収メス今猶ホ依然ク
リ蓋シ此事ノ始末ハ逐一記述シテ之ヲ英國外務衙門
ニ送附シ其参考ニ供シタルモ外務衙門ハ果シテ注目
セシヤ否未タ之ヲ知ルヘカラス

ハウス氏ハ斯ノ如クイト長シキ談議ヲ叙ヘ頻リニ
潛商云レヲ喋リスト虽レコハアルマンキ事柄ナリ蓋
シ日本ノ海関税ハ甚ク寛ク罰則ハ却テ甚ク嚴ナルヲ
以テ事實敢テ潛商スルニ至ラサルヘシ然ルニ税関ノ

官吏ハ漫ニ潛商スルモノアルラント自信シ外國公使
ノ其居留人ト協議スルヲ俟タス俄ニ居留人ノ伺港以
來享有スル陸揚ノ便宜即チ其貨物ヲ自己ノ波戶場ニ
却スノ自由ヲ剩カント欲シ官設ノ波戶場ヲ除クノ外
ニ就イテ上陸セントスルモノアレハ將ニカヲ以テ之
沮マントセリ是ニ於テ「サア、ハリ、パアリス」氏ト政府
談議其カヲ不當不要ノ急々用フルニ於テハ氏モ亦タ
カヲ以テ應スヘキ旨ヲ通知セラレタリ而シテ其直ニ
太政大臣ニ致書セシ所以ハ此件ニ就テ外務卿ヨリ報
知スル所ナカリシカ爲メナリ又敢テ強迫シテ政府ノ
肯諾ヲ要セシニアラス双方談議ヲ經テ事全リ甘結セ

第二項 予ハ又英國公使ノ其居留人ヲシテ石炭
輸出税ヲ免レシメタルノ不當ナルヲ批摘シタリ爰ニ
其詳細ヲ悉サンニ一千八百六十九年ノ末ニ於テ公使
ハ一札ニ署名シ廣告スルニ汽船ニ搭シ輸出スル石炭ノ
石炭ハ船ヲ用テ視做シ輸出税ヲ課セザラントテ議
決セル者ヲ以テセリ爾來日本政府ハ此税ヲ免シ為
テ歳入ノ額ヲ減セルト曾テ少シトナサス〇予輩ハ曩
キニ此廣告ヲ見ルノ後屢々公使ノ協議一決セリト云
フ憑據ヲ示サレシトテ請求セリト虽氏未タ曾テ之ヲ
得ヌ是レ公使好シテ啓示セサルニアラヌ啓示シ克ハ
ナルナルヘシ何トナレハ其憑據トスヘキモノアルナ
ケレハナリ蓋シ此議ハ允准スルハ固ヨリ日本政府ノ
本意ニアラス然リト虽氏如シ斷然之ヲ却ケハ前ニ表

記スルカ如ク無法ノ威迫ヲ受ルヘカラス故ニシス
損害ヲ蒙リタルヤ實ニ疑ヲ容ルベカラス
ヘラルト
以上第二項ノ説ハ無稽モ亦タ甚タシ九ノ船用ニ供ス
ル貨物ハ船ヲ無税ナルハ條約ニ拠テ明ナリ以石炭亦
タ其藩國中ニ括スヘキモノトナス而シテ其實ニ船用
ニ供スヘキモノト輸出商品ニ屬スヘキモノトヲ判別
スル曾テ易カラス往々双方ノ争ヲ所トナリ頻ニ煩
堪ヘサルヲ以テ政府ハ自ラ其故當ノ官ニ令シテ爾后
税ヲ石炭ニ課セザラシメタリ「サア、バアヤリス氏ハ此變
革ヲ英國人ニ通知セルニ過キヌ米國其他諸國ノ公使
ニナリ規ニ出テ各國ノ商估ナ税ヲ納メサルモ政府
ハ之カ為シ毫モ異議アルナシ

第三項

予ハ公使ノ曾テ一貴官ニ對シテ乱暴ノ
行爲アリシヲ叙ヘタリ蓋シ此ハ數年前神戸港ニ於テ
スル所ニシテ其害ヲ受ケタルハ目下日本政府ニ於テ
最モ權柄ヲ掌ル參議ノ一人ナリ斯ク公使ノ狼藉ニ及
ヒシ所以當時其傍ニアルモノ猶ホ之ヲ詳ニセヌ予亦
タ之ヲ推究スルヲ得ヌ而シテ其現行ヲ證スルモノ少
カラス就中「イフ、ロウダ」氏ハ尤モ親ク之ヲ目撃セリ
此ハ當時公使館ニ屬スル一吏ナリシカ今ハ日本ニ於テ
法律家ノ門ヲ掲ケ頗ル名聲ナリ

ヘラルト

前項ニ依テ「ハウス」氏ハ證人トシテ特ニ喚起セル「ロウ
ダ」氏ノ現号「ラルト」ニ籍リテ以テ公然「ハウス」氏ニ

與スヘカラサルヲ廣告スルハ「ハウス」氏ノ為ソ不幸之
ヨリ大ナルハナシ其自家ヲ補ハンカ為ソ推挙スル所
ノモノ却テ自家ヲ傷フニ至リシハ洵ニ氣ノ毒十萬ナ
リ是レ於テ之ヲ觀ル「ハウス」氏ノ記スル所ハ全ク無
根ノ妄言ニシテ英國公使曾テ神戸ニ於テ參議若クハ
他ノ一人ニ對シテ狼藉セシ「ナキ」亦タ疑ヲ容ルヘ
カラス 以下略之

